

人間は感情の動物であり、わけても詩歌人は情動豊か。感情が皆無の歌はないとも思えるが、より直截の語彙・表現、顕著な表白・内容の作を挙げた。

【激情】

火の如くなりてわが行く枯野原二月の雲雀身ぬちに入れぬ
ゆく秋の川びんびんと冷え緊まる夕岸を行き鎮めがたきぞ

前川佐美雄『捜神』 1964年
佐佐木幸綱『群黎』 1970年

【憤・怒】

吾は強し怒りを胸にたたみつつ思ひなほして空系みもする
眠るべき喉けものごとく渴くアメリカ滅ベソビエト滅ベ
子にとりて我こそが鬼 かがり火を焚きて怒りて泣かす秋の夜
少し前のわが怒りひとに見られしや機嫌よくなりいるをやさしむ
天罰といひし人ありその人にありとあらゆる天罰くだれ

柳原白蓮『踏絵』 1915年
竹山広『葉桜の丘』 1986年
谷岡亜紀『闇市』 2006年
田中多津子『形代Ⅲ』 2007年
本田一弘『磐梯』 2014年

【疎】

何すとして執ねくもかくまつはれる志波不気餓鬼ぞ去にねとくとく
はじめての看取りをしたる早春よりわれは故郷を疎みはじめき

佐佐木信綱『老松』 2004年

【寂・孤独】

唯一木ここの春を過しつつさびしくゑむかつまなしにして
十年をわびて人まつひとりゐにざれ言いはんすべも忘れし
さびしかりし心のすさび化粧して来しこといかに思はれてゐむ
行く道の真向うにして甲斐駒の孤絶の白をわがものとする

松岡秀明『病室のマトリョーシカ』 2016年
橘糸重子『いきゝ川』四号 1897年
九条武子『金鈴』 1920年
石川不二子『牧歌』 1976年
保坂耕人『風塵抄』 1988年

風が哭く 骨に凍み入るけ寒さを孤りのものと受くるときの間 玉井慶子『黙約の譜』 2008年
勝ち残るたびに孤独に近づくを椅子とりゲームのさなか気づかず

俯瞰する三〇〇メートル見るほどに地上はやはりさびしいところ 鈴木陽美『スピーチ・バルーン』 2018年
足立晶子『はれひめ』 2021年

【喜・幸】

春たたばかへらん君をまつ身には年のなごりも惜からぬかな 徳富久子『いさゝ川』三号 1897年
君と行く国に幸あれ新らしき家居つくと海こえてゆく 藁谷みか子『夕風』 1942年
花婿さんと彼方より誰かに呼ばれおり今宵限りのよき響きかな

久松洋一『ビジネス・ダイアリー』 1994年

俵万智『プーさんの鼻』 2005年

小紋潤『蜜の大地』 2016年

吾子^あ生れて三日目の朝病室に読む投稿歌どれもこれもよし
風光り嫩葉かがよふ六月のよろこびとして若鮎^{のぼ}遡る
おれの飼う蛙に君が言う「ただいま」をしあわせの音としている

佐佐木定綱『月を食う』 2019年

【想・慕】

かくばかり思ふは知らでかくばかりこふるとしらで音づれのなき

佐佐木信綱『小鈴詠草』 1893年

片山広子『翡翠』 1916年

五島茂『石樽茂歌集』 1929年

心狂ひ君をおもひし其日すら我が身一つをつひに捨て得ず
燃ゆる身のくるしさひとり寄せうべき人とおもへば悔あらめやも
霧のごときあはき思ひが湧きやまぬ良いのだらうか思慕と呼んでも

矢部雅之『友達ニ出会フノハ良イ事』 2003年

森屋めぐみ『猫の耳』 2014年

一度だけ駅まで傘を分け合ひしことひんやりと胸を焦がせり
北窓のウインドチャイムを鳴らす風 あなたを思ふわたしを思へ

経塚朋子『カミツレを摘め』 2016年

【苦・切】

ひきだしを引けど引けざりすぐそばに隠れて見えぬものにくるしむ 森岡貞香 『百乳文』 1991年
せつなさの湧くは鎖骨のあたりより ひりひりと迫りいだせる桜樹

横山未来子 『樹下のひとりの眠りのために』 1998年

【慈愛】

バスケットが好きかバスケットが好きだ 十六歳のお前が好きだ 馬場昭徳 『大き回廊』 2003年
数か月のちには言葉となるはずのこの声のみの声の愛おし 細溝洋子 『花片』 2016年

【悲哀・嘆】

うつし世の我世の限泣かんとも今は二度あひがたき君 印東昌綱 『磯馴松』 1903年
かなしみの遠景に今も雪降るに 鏝つぼ下げてゆくわが夏帽子 齋藤史 『ひたくれなぬ』 1976年
ゆりかごの歌うたおうか生涯にたった一人のわが子の通夜 住正代 『赤い蠟燭』 1990年
母となるわたしに母はもういない 滴るほどの春の空なり 駒田晶子 『銀河の水』 2008年

【絶望・残心】

のぞみとてなき生きの日のこころ 捉られ見る夕庭のかぎろふくれなぬ

栗原潔子 「心の花」 1948年

虚無と絶望の底ひゆ湧き来ほのぼのと明るきものを見む日のあらむ

佐佐木治綱 『続秋を聴く』 1960年

浮雲の約束さはれ海市への思ひ消残る この年暮るる

塩川郁子 「心の花」 2017年

【渴望・飢餓】

毎日が続きの日 夕食に凍ったワインがほしい もっともっともっと

佐佐木朋子 『パロール』 2006年

翼こしむねがふ鳥のこゑ降る林なりひもじさこそ詩ひもじさこそ歌

伊藤一彦 『土と人と星』 2015年

あれに何も遣ってはならぬ 樂しげに家族が笑う家という飢えに

奥田亡羊 『男歌男』 2017年

【矜持・意気】

卓上の逆光線にころがして卵と遊ぶわれにふるるな

築地正子『花綵列島』 1979年

我は私の生を生きたし 垂直に降る東国の雨に打たれて

田中拓也『直道』 2004年

強い人にはなりたくない 玉葱は水に三分さらすがよろし

藤島秀憲『ミステリー』 2019年

黄昏を見るが怖いかな男たち私は鴛鴦のやうに元気よ

奥山かほる『安息角』 2021年

【悔・恨】

秋の実のころがり落ちて棒にふる不覚一生地団駄を踏む

青木信『汎神論』 1993年

悔いるべきはただ一つのみ子なきこと酒酌み交わす息子ありせば

黒岩剛仁『野球小僧』 2019年

遮断機の降りくるやうに拒絶され玉ねぎ六個みぢん切りする

桐谷文子『マザーグースの翼にのつて』 2021年

【鬱・愁】

憂鬱なひとひは暮れて神経の繊維にとまる単語「ツエツエ蠅」

斎藤佐知子『モンキートレインに乗って』 2004年

正門を閉ぢて仰げる薄闇に校舎全棟春愁の塊

谷口基『春愁の塊』 2015年

【憎】

のぼせたる頬の紅のにくくして君に奪らるる我が心かな

木下利玄『銀』 1914年

少しづつ要求水準上げてくるC氏を憎む私の両目

武藤義哉『春の幾何学』 2022年

【断念】

草の露はらいて瓜をもぎしときある選択肢かちりと閉ざす

宇都宮とよ『エルキャピタンの雲』 1995年

【揺】

もう死にたい まだ死なない 山茱萸の緑の青葉朝の日に揺れているなり

鶴見和子『山姥』 2007年

【感傷】

いつか来む別離といえど青雲の爽やかなりし その日涙が

【省察】

かてを得るために詭弁を吐きし夜はさそり座の赤南天をはう
月下 子を捨てず殺さず殴らずに持ち帰りたり夫が抱きとる

晋樹隆彦『感傷賦』 1984年

田中徹尾『人定』 2003年

大口玲子『トリサンナイト』 2012年

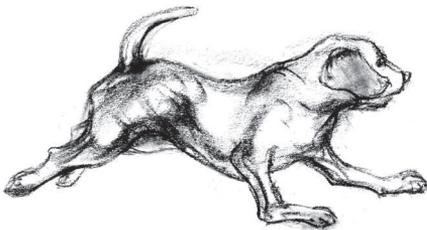
【安堵・感懐】

幼子のいたづき全くいえしよりあけたる窓の梅さきにけり
何といふ用はなけれど会へば足る幾人かありてわれの平安
ひとり帰る家路にわれは宥されて西日隈なくわが裡照らす

佐佐木雪子「心の花」 1902年

佐佐木由幾『半窓の淡月』 1989年

高山邦男『インソムニア』 2016年



色がつくことで物は具体的にになり、目に見えない気分も鮮明になる。
作者と読者は色を媒体にイメージの共有をはかることができるのだ。

【青】

土耳古青とらこあをとなりたる山の四時過ぎにげにすなほなる食欲ありぬ 斎藤史『うたのゆくへ』 1953年
うるとらの父よ五月の水青き地球に僕は一人いるのに 谷岡亜紀『臨界』 1993年
花束をもらふなら青 初夏の花舗にあふるる光の束を 大口玲子『ひたかみ』 2005年
みづ還り積雲光り八月のうみ孔雀青得て完結す 峰尾碧『森林画廊』 2018年

【藍】

今日は少しの藍を加えなん七月の私の画布のふるさとの海 宇都宮とよ『地水説』 1989年
藍襲より出ずる青なれど水浅葱、縹、花紺、英語に出来ぬ 鶉沢梢『シヌック・雪食う風』 2012年
わたつみの藍のあかるさまぶしさのいはけなければ今日は海彦 小紋潤『蜜の大地』 2016年

【紺】

紺色の雨傘さしてバス停に深く刺さった待ち針となる 大谷ゆかり『ホライズン』 2017年

【水色】

みづいろに暮れはじめたる穂高岳雲が帰つてくるといふこゑ 斎藤佐知子『帰雲』 2011年

【赤】

さくらんぼ飾ればあかき真日くれて子を待つ不思議な月日すぎゆく 住正代『赤い蠟燭』 1990年
天つ空赤く血に染め丹沢の山に大きく陽は沈みゆく 今泉進『冬の雷郎』 1996年
あの赤い花がつつじでこの白い花もつつじと呼べる不思議さ 俵万智『プーさんの鼻』 2005年

ばらの花、ゆすらうめの実、郵便受け 赤いものみな闇に吞まれる

清水あかね 『白線のカモメ』 2020年

【紅】

病室の日のあらはなれば君が頬にさすくれなゐをすべなくも見し
温室咲きのきりしま紅く空気をぼかし、病体は青白い微笑を発散する

新井洸 『微明』 1916年

金子薫園 『白鷺集』 1937年

重慶に着きてはじめて見る夢のなかに華やぐ紅の帯

石川一成 『長江無限』 1985年

【桃色】

結べども桃いろにならぬ愁かなくれなみの紐白妙の紐
ももいろの木の実のやうな踵してゆきたりしかば恋はんその母は

木下利玄 『銀』 1914年

真鍋美恵子 『雲熟れやまず』 1981年

【緋】

緋の房の襖はかたく閉されて今日もさびしく物おもへとや

九条武子 『金鈴』 1920年

【黄】

蝶一つ黄いろく小さく飛べるなり高原ゆれて嵐めく風
月を黄色に塗りつぶしたことから間違いがはじまって小鳥も犬もみな左むく

山川柳子（影） 『山玲』 1968年

木尾悦子 『驟雨の中の噴水』 1997年

太陽を黄色く描く四歳のルイズはいかに日の丸を見る

小川真理子 『母音梯形』 2002年

【橙】

ピルの狭間をステッチかけてゆくようにオレンジや黄の電車行き来す

蔵田道子 『Rendezvous』 2009年

画帖に挟みし節黒仙翁かほきたり信濃の夏の橙色のまま

田中薫 『土星蝕』 2019年

【褐色】

褐色に木の実垂りつつ無患子の梢に春はいまだしづけし

遠山光栄 『褐色の実』 1956年

褐色の吐物が執ねく匂ひある小部屋なり輸液を長く続ける

森本秀子『深部注射針』 1978年

【緑】

結界に降る雨あしは光りつつ深き杉生のみどりにしづむ

安藤寛(浄智寺歌碑) 1978年

あひ寄れば個性うすれてくるものをさみどり固く蕾むあぢさゐ

玉井慶子『六月の谷戸』 2000年

県鳥のきびたきのこゑはつなつのみどりのいろを羽織りて来たり

本田一弘『磐梯』 2014年

【紫】

むらさきにすがれ立つ庭の葉鶏頭を子は事もなげに引き抜きゆけり

佐佐木治綱『続秋を聴く』 1960年

むらさきの半蔵門線みずくぐりすいてんぐうにちかづきにけり

佐佐木幸綱『アニメマ』 1999年

ゆふぞらの消紫も消えにけり消人間としてわれ立つか

伊藤一彦『柘榴笑ふな』 2001年

【金】

夕かげを総身にまとひほつそりと黄金の鶴となりて歩めり

佐佐木由幾『一茎の草』 1995年

巻貝のかたちに我のねむるときあかるき金の雨となりて来よ

横山未来子『金の雨』 2012年

【銀】

砂の上に又手ゆぶちまくる鰻はね返りはねかへす其の銀の色

印東昌綱『家』 1934年

夏の夜をふたりでおりぬ呼吸の間のしじまを銀の魚とびはねる

倉石理恵『銀の魚』 2015年

【白】

雲白く阿蘇また白き冬の日に白をはげしき色と思ひつ

築地正子『花綵列島』 1979年

山帽子、卵の花、野ばら、糊空木、高原は今白き花咲く

島綾野『心の花』 1980年

白き壁昇りてゆきし紋白蝶は光の白に溶けてしまえり

細溝洋子『コントラバス』 2008年

岩手山は白を激しき色としてみちのくの空占めてかがよふ

山口明子『みちのくの空』 2019年

【黒】

黒ずめる海を抉りてまろまろと夕日は深く沈みゆくらし

石樽千亦『海』 1934年

点点とくろきしただみの貝のある岩膚を朝のうしほがぬらす

栗原潔子『栗原潔子歌集』 1958年

黒き腹黒き死しにがほ顔片片と出で遇ふ地上こゑ閉ざしゆく

竹山広『葉桜の丘』 1986年

漆黒のピアノであるが春だけはうすもも色でいたいと思う

武藤義哉『春の幾何学』 2022年

【灰色】

むかしわれ神の教を学びつる麻布のすみの灰色の家

片山広子『翡翠』 1916年

目覚めればグレーのじゅうたんみるみると海の色へと変われる夜明け

安藤美保『水の粒子』 1992年

台形に積まれある灰色のバラストの端より崩れくる秋の始まり

田中多津子『形代Ⅲ』 2007年

【その他】

野の末を移住民など行くごときくちなし色の寒き冬の日

佐佐木信綱『新月』 1912年

なにもものも載せぬ百年 古伊万里の孤独極彩色の孤独よ

佐佐木幸綱『百年の船』 2005年

ドアを開けたとたん沸騰したように落ちてくる深海色の雨

佐佐木朋子『授記』 2012年

